『はつこいリターンズ！ ～恥じらうギャルは告白できない～』

特典シナリオ台本

【登場人物】

雛桜（ひなさ）ひより（１５）

ー照れ屋な幼なじみのギャル

時音女子高等学校一年生。
「女の子が好き」と公言する幼なじみのギャル。
明るい口調で話しノリもよい。
水泳が得意で、中学時代には県大会に出るほどの実力者。
見た目に相反して、気弱な部分も…？

年齢：１５　身長：１５６（ふつうぐらい）
血液型：Ａ型　バスト：Ｃ

【あらすじ】

時音女子高等学校に入学したばかりの『私』
ある日下校しようとしたところ下駄箱を開けると、
そこには一通、差出人不明の手紙があった。

手紙には「放課後、時音神社に来て欲しい」と書かれていた。
時音神社は、縁結びで有名な地元の神社であり、
告白の名所としてもよく知られている場所だ。

手紙の指示通り神社に向かうと、
そこには、幼なじみの『雛桜ひより』の姿があった…。

小さい頃から続いてきた関係を変えるのが怖かったひより。
タイムリープした二週目の世界では、
『私』との恋を成就させるため、積極的にアプローチをしてきます！
恋愛に奥手だけど頑張る彼女とのストーリーをお楽しみください！

【第一話：あたし、告白します！（むり）】

○神社の境内（夕方）

放課後、下駄箱に入っていた手紙で呼び出されたあなた。
待ち合わせ場所である時音神社の門を潜ると、
呼び出し人である「雛桜ひより」はそこにいた。
スマホをいじって下を向いている。

「（あなたの存在に続いて）あ、きたきた…！」

「なに、どうしたの？
そんな顔して…」

「ふふふっ、びっくりした？
あたしだと思わなかったでしょ？」

「（ちょっと笑いながら）そうだよ？ 手紙。
下駄箱に入れておいたの…。うん、あたし」

「え、わかった？ 字……？」

「ねえ、それは別にいいでしょー？
あれでも一生懸命書いたの！」

「読めたから、きたんでしょー？
からかわないでよ、もう」

「学校、慣れたかって？ そりゃずっと通ってたし…。
え、あ、入学してまだ一週間だったよね！
なんか、時間感覚なくて」

「……ってもう、今日はいつもの調子で喋らないよ？
……は、話したいことがあるから」

「……小さい頃から友達だけどさ、あたしたち。
もちろん、今も友達。友達なんだけど…」

「わざわざ呼び出したってことは、
なんかあると思うでしょ？
その、なんか…。
……察しろよぉー…」

「時音神社に呼び出しだよ？
ここって、ほら、…縁結びで有名じゃん？
……だから、その……」

「（深呼吸して）あ、あたしね、あたし…」

「（告白しようとしてその間になるがうまく舵をきれない）
（声にならない戸惑い）んー……あー……」

ひより、怖さと恥じらいから自分の気持ちを否定してしまう。

「あー！ もう、だめ！ やっぱなし！ なしで！
何も言ってない！ かもしんないけど！ なし！」

「……ほんとに、なんでもない。なんでもないって。
……嘘じゃない、ほんと！」

「うん、そう、話はあるの。でも、なし」

「……だって、えー。
めっちゃはずいんだもん」

「うー、はずいもんは、はずいの！
これから言うから！言うって！」

「……やっぱり、言わない！」

「……え、あ……好きな人？
……まあ、いるよ？」

「……女の子。
あたし、言ってるでしょ？女の子にしか興味ないって！」

「……そう。出来たの。
出来たって言うか、ずっと好きなんだけど…」

「……うん。その人に、
気持ちを伝えたいと思ってるんだけど、
ちゃんと受け取って貰えるかわからなくて…。
女同士だからびっくりするかもしれない、とか…」

「そ、そう！ そうなの！
だから相談！ 今日はこの相談だった！」

「他にいないじゃん？ こんなこと話せるの。
あたしのこと、昔から知ってるし…！」

「そうだ、あたしの告白がうまくいくように、手伝って！」

「その子とうまくいくように協力してくれない？
お願い！このとーり！」

「あたしも、はじめて好きになった人だし、
大事にしたいんだよね…。できれば、うまくいかせたいし…。
あたしの恋愛力向上に、付き合ってほしい、というか…」

「いい……？
……ほんとに？　ありがとうー！」

「……あたし、頑張るね！
それじゃ、よろしく！」

【第二話：木漏れ日の相談会】

○学校・中庭（昼）

昼休み。あなたはひよりのこと待っている。
遠くからひよりが走ってくる。

「（急いできて）お待たせー！ごめん～～～！
ちょっと捕まっちゃって」

「「部活の勧誘。水泳部入らないかって。
クラスに中学の時に出た県大会、見ていた子がいてー……。
マジごめーん」

「んー、誘われたけど、高校でもやるかは保留！
今日は、あの相談の話！ 恋バナ！
とりあえず、お昼食べながら話そ！」

中庭のベンチに、ひより座る。
あなた、隣に座る。

「（軽く鼻歌を歌いながら、お弁当箱を取り出す）」

「あー、おなか減った～～
さ！ 食べよー！」

ひよりはきちんとしたお弁当箱だが、私は菓子パン。

「え、今日の弁当、パンだけ？
購買で買ったやつ？ それで足りる？」

「ちょっとさー、栄養偏るよ、それじゃ」

「あたしの少し分けてあげる。
何がいい？ なんでもいいよー。
（指をさされて）…これ？
もち、オッケー」

「あ、お箸ないよね。
……そっか。
……なら、食べさせてあげよっか？」

「そ、そう！ これは大事なの！
ほら、相談！」

「関係ある！
恋人っぽいのに慣れておくのもあるし…。
それに『あーん』やったら、意識して貰えるかもしれないでしょ？」

「だ、だから！（照れながら）は、はい！ あーーん……」

「…どう？ おいしい？
じゃ、じゃあ、つぎ！」

「……あーーん」

「（ぼそっと）……やばっ。
あ、ほんとうに美味しそうに食べてて、可愛いなって。
…小動物的なかわいさ、あるよね」

「あー、自分が可愛いって事、わかってるでしょ？
わかってるなー、その目は」

「これからはあたし以外とご飯食べちゃだめ。
（小声）……うそだよ（普通の音で）うそ！」

「え？　私も？　食べさせてくれるの？
え、えー！（小声）……うれしいー」

「…たしかに、食べさせられる側も慣れとかないといけないよね」

「（くちをあけて食べる）あ、あーん…。
（食べて咀嚼する）……」

「（あなたの視線に気付いて食べながら）んー！
あんまりこっちみないで！もー」

「（飲み込んで）……はあ、なんだか熱くなってきちゃった」

ひより、ペットボトルの蓋を開ける。

「（水を飲んで一息つく）ふうー……。
…友達同士だけど、いざ、こういうことやると恥ずかしいね」

「幼稚園の頃、新婚さんごっこしたの思い出す（笑）」

「（相づちで）うん…。ね。ずっと遊んでた、あのときから。
（数えるように）小、中、高まで同じだもんねえ…」

「この先も一緒にいられるといいよね。
このまま…かは、わかんないけど」

「（あなたに向かって意味深に）……好きな人できたからね」

「というかさ、もしかして、
あたしが女の子好きって言ってるの、ビジネスだと思ってた？
（リアクションして）違うよー、ほんとだもん！
隠すつもりなかったし」

「そう言っておいた方が、好きな人が出来たときに、
ちゃんと好きって言いやすいかなって」

「実際は難航中ですけどね！」

「……ふーん。あたしの好きな人、興味あるんだ？」

「じゃあ質問、どんな人を好きになると思う？」

「……知りたい？」

「ヒント。……あたしの近くにいる人。
……うん、ぜったい知ってると思うよ」

「……わかんない？
……じゃあー、ここでおしまいっ」

「別に？あたしに好きな人が出来たって話なんだから。
相手は誰でもいいでしょ？」

「……なにぃ？その顔。（嬉しそうに）…しっと？」

「ふふっ、ごめんごめん、ちゃんと教えるから。
タイミングがきたら」

「……ちなみにさ、今、好きな人とかいたりする？
参考に聞きたくて」

「……そっか。そうだよね。ううん、なんでもない。
もうちょっと、攻めなきゃ！って思っただけ！」

「あ、お昼休み終わっちゃった！ 教室戻ろ！」

【第三話・恋心は教室の片隅に】

○教室・放課後

ひよりはクラスメイトと会話している。
あなたはそれを遠くで聞いている。

「えー！　みいこ、彼氏できたんだー！　おめでとー！
え、この後会うの？　デート？
いいじゃんいいじゃん」

「別にあたし、アドバイスなんかしてないよー。
恋愛マスターってなにぃ？（笑）
みいこが頑張ったんだよ、ほんと」

「え、さちも今度？
まあー……あたしでよければ、なんでも聞いて！
ふふふっ、じゃねー！　明日ー！」

ひより、あなたの席の近くにやってくる。

「（ため息ついて）はああー……」

「……見てた？　さっきの。
あたし、よく恋愛の相談されるんだよねえ」

「おかしいでしょー。
むしろあたしが今、相談してるくらいなのに。
経験ないっていうタイミング、完全に逃してててさ……」

「真剣に話してくれるだもん。
そしたら力にはなりたいじゃん？
……だから色々調べたりして……」

ひより、喋りながらお菓子を取り出して開ける。

「んー……。
昔から言いたいことはちゃんと伝えられないパターン多いかも。
あ、お菓子食べる？　はい」

ひより、あなたにお菓子を渡す。
ポリポリ食べながら喋る。

「なんか、いい顔しちゃうんだよねえ。
すぐ仲良くなれるんだけど、深くは踏み込めない、みたいな？
今まで作ってきた関係をあたしの行動で壊したくないって思っちゃう。
（リアクションに笑って）そう。
……考えすぎなんだよねえ～、いろいろ」

「ははははっ、ばれてるー。
意外と闇ある？　まあ人並みにはねー。
見た目は派手だけど、中身は違うのよ」

「……知ってた？　ふふふっ、それを知ってた」

「怖がり、かあ。たしかに。
（ごまかすように）……お化けとかも苦手だし？
うん、ホラーとか無理無理」

「前うちで、怖い映画見たとき、やばかったよね。
ずっと、ぎゃーぎゃー言ってた（笑）」

「だって、そっちが誘ってきたじゃんー。
もうぜったい見ないから。ぜったい！」

「びびりっていうな。
あたしは、泣けるやつか楽しいのがいいの！」

「ハッピーエンドがいい！
今度はそういうの見ようよ。またうちで」

「…ん、お菓子？　もっと欲しい？　いいよー。
（袋から取り出しながら）なんかハマっちゃうよね、ポッティー」

ひより、ポッティー（スティックタイプのお菓子）を
あなたに渡して

「（独り言つぶやくように）……ポッティー、か。
……ねえ、恋人ができたらさ、
ポッティーゲームとかやったりするのかな」

「や、やらないか。
まあ、意外と定番みたいなのやらないよね、きっと」

「……やって、みる？
え、いや、ほら、度胸つきそうじゃない？
告白って勇気が必要だし、訓練にいいかも」

「本当にそう思ってるって。
……ほんと」

「ちゃんと本音を言う練習……も、した方がいいか。
……うん。告白って自分の気持ちに正直になることだよね……」

「（葛藤して）んーー……あー……」

「……そう、あたしがやってみたいの！　興味あるの！
だから、やろ！」

「……笑ったら罰ゲーム？　…わかった、いいよ？」

「はい、そしたら、くわえて？
（くわえながら喋る）準備はいい？　ゆっくりね？
……スタートッ」

ひよりとあなた、ポッティーをゆっくり食べていく。

「（ひより、真剣に食べていく）……」

「（食べきるところで唇が少し触れてしまい）あっ、
（離れて）んーーー！！いま……ちょっと……（小声で）あたった？」

「……うん。……なんか、妙に真剣にやっちゃったね……。
なんていうか、……ドキドキ、した」

「……どっちも笑わなかったから罰ゲームはなしだね」

「……うん、そろそろ帰ろっか」

間。

「……（落ち着くために息を吸って吐く）」

【第四話：二人の部屋、二人の時間】

○ひよりの家・玄関

「いらっしゃい！ あがってー！」

「あれ？髪切った？
ちょっと？ やっぱりー。
（あなたをじっくりみて）……いい感じの長さだねー」

「最近制服ばっかりだったから、私服新鮮……！ うん、かわいい」

「（遠くの方に声をかけて）あ、おかさーん！あたしたち部屋にいるから！
……うん！飲み物とか自分で用意するから！…大丈夫！」

「ごめんごめん、じゃ、いこ！」

○同・ひよりの部屋の前

「うちに来るの、久しぶりだよね。
…びっくりすると思うよ、多分。
めっちゃ掃除したから！」

「ほんとだって！ ほら！」

ひより、扉を開ける

○同・ひよりの部屋

「ふふっ、綺麗でしょー？
服とか鞄とか結構断捨離したから、すっきりしたの」

「にゃごちゃんのぬいぐるみは、ここ！
ちょっと汚くなってたから、洗ったの。
この笑顔、癒されるんだよなあ」

「え、なに？ 本棚？ 何か気になる？」

「（気まずそうに）あ！ あーー、その本ね、もらったの！
恋人がいる友達に！ それは別にいいの！ そこ、座って？」

あなた、ベッドの上に座る。
隣にひより、勢いよく座ってくる。

「よいしょー！ ふふふっ」

「ね！ 見違えたでしょ？
今考えると、前は人を呼ぶような状態じゃなかったわ…」

「なんか、このままだと将来的にもっと物が増えて、
ひどいことになるかもと思って、片付けた。
……うん、未来からのお告げってやつ」

「今ね、変わろうと思ってるから。
高校生になった…のも、あるけど…」

「やりたいことやっておかないと、いつか後悔するから。
やりたいことは自分しか叶えてくれないし…」

「え、手伝ってくれた？ 部屋の掃除？
だめ。それじゃ意味ないの。
普通に褒めてくれたらそれでいいよっ」

「……ふふっ、うれしい。
ほんと、優しいよね」

「あ！そうだ！ ちょっと待ってて…」

ひより、立ち上がって、クローゼットから服を持ってくる。

「この服、似合うかなと思って取っておいたんだけど…。ね、あたしぽくないでしょ？一時期血迷って、清楚系になろうとした時期の名残（笑）どう？いる？」

「ほんとに！あでも、サイズ合うかわかんないから一回着てみて！うん、今！みたい！」

あなた、立ち上がって服を着替え始める。（服は半袖ワンピースのイメージ）

「（ちょっと恥ずかしそうに）どう？サイズいける？…いい感じ？」

「あ、後ろ、チャック締める」

ひより、あなたの背中に回り、服のチャックを締める。

「（チャックを締めながら小さな息づかいを数回）」

「（小声で）…うなじ。ううん、はい！鏡でみてみる？鏡は、ひだり！」

ひより、あなたの後ろから鏡をのぞく。

「かわいいー！めっちゃいい！似合う似合う！前から持ってたみたい」

「え、でもこれなら……」

ひより、近くの箱の中を漁ってヘアピンを取り出す。

「たしかここに……あった！」

ひより、あなたの前に立って

「このヘアピンつけてもいい？
合うと思うんだよね」

ひより、あなたの髪を触って(掻き上げて)
ヘアピンをつける。

「(ヘアピンをつけている時の息づかい)」

「…ついた！
(ちょっと引いてみて)あー、かわいいー！」

「(鏡を見せて)ほら、自分でもみて？
(プラスな意味で)……よくない？
ねえ、いいよね！」

「あと小ぶりのハンドバッグ持ったらもうカンペキ。
(心の声が漏れ出すように)うわー、こんなカノジョ欲しー。
デートしたいー……」

「……え？…行く？…これから？
……デート？」

「……いきたい。
(慌てて)ちょ、ちょっと！待って！あたし準備…！」

ひより、独り言を言いながらその場をうろちょろする。

「(独り言)えー、なに着よっかなーー…。
(思い出して気付く)あ！
あ、でもだめだ、もう着れなかった気がする…」

「えーー、どうしよー……。
（あなたにぶつかって）わっ！」

ひより、あなたをベッドに押し倒す形になる。
（以降、緊張のムード）

「（目の前にいるあなたに恥じらいながら）ご、ごめん。
……ぶつかっちゃった。
痛いところない？　……うしろ、ベッドでよかった」
「（緊張の間の後）……ねえ。さっき、デートって言ってくれたよね。
間違いない？」
「……デート、ほんとのカノジョだと思って、していい？」
「……どういう意味って。……そのままの意味」
「そのままの意味、だよ」
「言ったでしょ？もうちょっと攻めなきゃって。
今日がそのタイミングみたい」
「……あたし、着替えるね。
……一旦、部屋の外で待ってて」

ひより、あなたの上からどく。

【第五話：月明かりに照らされた心】

○学校・プール（夜）

「……楽しかったね、デート。
うん、あっという間ー」

「似合いそうなハンドバッグ探して、ついでに他の服もみて、
それからお茶して、いちごのタルト食べて…」

「で、今。ここはどこでしょう？」

「ふふふっ、やばいよね。
なんであたしたち、学校きてるんだろ」

「そりゃ泳ぎたいって言ったけど……。
こんなことになるとは思ってなかった」

「あたしは、たくさん歩いたから、
軽い気持ちで言ったのに。
学校のプールいこうなんていい出してさ」

「意外とワルだね、おぬしも。
…あたしも。ふふふっ」

ひより、靴下を脱ぎ始めて

「（脱ぐアドリブをして）
え？ 何って、足だけでも入ろうかなって。
せっかくだし」

「ね、入ろうよ、一緒に」

あなたも靴下を脱ぎ始める。
二人、水に足を入れる。

「（足に水つけてながら）はあああーー、つめたーい。
……うん、水の中、気持ちいいねー」

「……夜のプールに入ったの、はじめて。
見慣れてるはずなのに、別世界みたい」

ひより、爪先で軽く水面を撫でる。

「……水泳部？　そうだなあ。
入るか迷ってる、まだ。
水泳好きだからやりたいけど……。
今はじめたら、中途半端な気がする」

「ここに戻ってきた目的をやり遂げてからじゃなきゃ…」

「（息を吐いて）はああーー。
結構浮ついてたんだけど、少し落ち着いてきた。
夜になってようやく（笑）」

「いつも通り楽しかったけど、
いつもとは違う緊張があったから……」

間。

「……ねえ、もし、人生やり直せるとしたら、何がしたい？」

「……あたしは、好きな人の特別になりたい。
ちゃんと気持ちを伝えて、そして、結ばれたい」

間。

「……告白しようと思えばきっとできた。
でも、…勇気がなかった」

ひより、震えながら喋る。

「あたしの好きな人は、……昔からずっと傍にいてくれて。
楽しかったことも、嫌だったことも、なんでも話せて…。
その人がいない毎日は考えられなかった。
だから、気持ちを伝えたら……。
ぜんぶ、今までの二人がなくなっちゃう気がして……」

「でも、伝えなかったら、結ばれる未来はこないって知った。
だから、あたし……、あたしは……」

「（深呼吸して）一回しか言わないから。
ちゃんと聞いて」

「こっち、きて？」

間。

「（少し泣きそうになりながら）……すき」

「あたしの好きな人は、……あなたです」

「……。ごめん。
なんか、涙でできちゃった……。
……うん、大丈夫、自分で拭く」

「……すぐ返事しなくていいよ。
ちゃんと、考えて欲しいから」

「……うん。待ってる」

ひより、プールから足を抜いてひとり帰っていく。
去っていく足音が聴こえる。

【第六話：きっとやり直せる、もう一度】

○神社の境内（夕方）

あなたはひよりを呼び出す。
彼女と話をするために。

「……やっ。
まさかそっちから呼び出されるなんて思ってなかった」

「……ふふふっ。
しかも時音神社に呼び出すなんて……。
あたしの真似したな？　なんてね」

「……一瞬、変な期待しちゃったじゃん。
もう、ばか（笑）」

「うん、そうだよね。
この間の話についてでしょ。
……うん。……うん。
ありがとう、考えてくれて」

「……うん。
……あのね。この間の……やっぱり忘れて。
返事しなくていいよ」

「あたしも、あれから考えたの」

「気持ちは伝えられたから。
これ以上、求めるのはなんか違うかなって。
そこまで求めたら、罰が当たりそうで」

「もう十分なの。だから今まで通り……」

「……って、そんなの、もう通用しないか。
なんでもわかっちゃうだもんね、あたしのことは」

「……そう、怖がり発動中。
昨日も全然寝れなかった」

「ねえ、ひょっとしてさ、
前に時音神社であたしが告白しようとしてたのも、
気付いてた？」

「（ため息ついて）はあ……。恥ずかしー。
空回ってばっかりじゃん、あたし」

「……返事を聞いて、もしダメだったら、
あたし、壊れちゃうかもって……。
だから……」

あなた、ひよりを抱きしめて

「……え？　な、なな、なに？
どうして、抱きしめるの……？」

「（あなたに好きだよと言われて）え……。うそ…。
今、好き、って、言った……？」

「ウソでしょ…？
うそ……！
好きなんて、うそ……」

「……あたしなんだよ？
あたしでいいの？
……本当に、恋人にしてくれるの……？」

「嫌じゃない！　違うの、違う……。
どうしよう。わけわかんない。嬉しすぎて……」
「（もうすでに泣いているのに）……だって、泣きそう」
「……ねえ、もう一回言って欲しい。
……好きって」
「（それを聞いて）……。
あたしも言う」
「……すき」
「……すき」
「（耳元で）……だいすき」

間。

「（深呼吸して）すうう、はあ……。
心臓、ずっとバクバクしてて……。
落ち着きたいんだけど……ダメみたい」
「……ちょっと、信じられない。
あたし、今、夢でも見てるのかな」
「……よかった……勇気出して。
もう一度、ちゃんと告白できて……。
あたし、そのために、ここに来たんだもん」
「……あー、色々言いたいことあったのにー
気持ちがいっぱいで、言葉、でてこない」

ひより、カバンから手紙を取り出して

「はい！　これ！」

ひより、手紙をあなたに渡す。

「手紙！　書いてきた。
……ダメでも渡すつもりだったやつ」

「……ちょっと変なこと書いてあるかもしれないけど、
びっくりしないでね？」

「……隠し事はなしって決めたの。
ちゃんとありのままの自分でいたいから」

「もしかしたらね、ちょっと幻滅するかもしれない。
あたしに」

「……あ、今はダメ。ひとりの時に読んで？」

「手紙を読んで、もしあたしとは付き合えないって思ったら、
遠慮しないでね。
……でも、それでも、あたしと一緒にいたいって思ってくれたら、
そしたら、嬉しいな」

「……そうだね。次に会う時は、あたしたち恋人同士だね」

「……うん。じゃあ、また」

【ボーナストラック：恋人たちの休日】

○ひよりの部屋

ひよりとあなたが恋人になった後日談。
あなたは、ひよりの家に遊びにきている。

「…ねえ」

「……ねえねえ」

「……おーい。
スマホで、なにみてるの？」

「……あー、そうやって……」

間。

「（耳元に息を吹きかけて）ふーーっ！！
ふふふっ！ びっくりした？」

「だって、さっきから無視するんだもん。
……忙しい？
あたしが目の前にいるときは、構ってくれなきゃ嫌だよ？」

「え、あ、調べ物してくれたの？
今日のご飯食べにいくところ？
ふふふっ、かわいいー。じゃあ、許す」

「……え？ かわいいよ？ ぜんぶ。すべてが」

「そりゃ毎日言うよ。
本当のことだもん。
気持ちは伝えないともったいない」

「今までは、ほら、友達だったし。
恋人になったからもう全解放」

「ほら、こうやってくっついちゃう。
……ねー、なんか、甘えん坊になっちゃった。
あんなに恥ずかしがってたのになあ。
ふふふっ」

「あれ？ なんか、そっちの方が照れてない？
照れてない？ 照れてるでしょ？ でしょー」

「もう、ほんとにい……」

「(息を吸ってから) かわいいかわいいかわいいかわいいかわいい
かわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいい
かわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいい
かわいいかわいいかわいいかわいい！」

「ふふふっ。あー、たのしい……。
……しあわせ」

「……知らなかった。
両思いって、こんなに満たされるんだね。
片思い中の苦しみが嘘みたい」

「……うん、長かったからねー。
三年分プラスで苦しんでるから（笑）」

「……え、もしこれが夢だったら？
んー、そうだったら……」

「いい夢みたな！って感じ」

「当時は絶望していたけど、
もしここから目が覚めて卒業式の日になったとしたら、
あたし、猛アタックする自信ある」

「……うん。
ちょっとしたきっかけが必要だったんだよ。
神様には、感謝しないとね」

「……。せっかく二回目の高校生活なんだもん。
まだまだ一緒にやりたいことあるよ？」

「これからいっぱい、思い出作ろうねっ」

【ボーナストラック：相合い傘で一緒に帰ろう】

○学校・下駄箱

ひよりとあなたが恋人になった後日談。
ひよりの水泳部の練習が終わるまで待っていたあなた。
待ち合わせて二人は一緒に帰る。

「（後ろからハグして）
……おまたせ。
部活終わるまで、待っててくれてありがと」

「（雨に気付いて）……あ、もしかしてちょっと降ってる？　雨。
うーわ、傘持ってきてないー」

「途中で買うから、それまで入れてくれたり……。
え、家まで送ってくれる？
やさしー！　ありがとう！」

あなた、傘を広げる。
二人、歩き始める。

「大丈夫？　肩とか濡れない？」

「平気じゃない。
風邪ひいたらあたしが心配する。
ほら、もうちょっと、こっち」

ひよりとあなた、距離が近くなる。

「これで、さっきよりはましかな？
ふふふっ、たしかに。ぎゅうぎゅう」

「あー、そうだ。
水泳部でそろそろ大会の話が出ててさ。
……うん、練習長くなりそうなんだよね」
「大会終わるまでは一緒に帰るの難しいかも。
ごめんね？」
「そうなんだよねえ……。
土日も練習になるからさー。
会う時間減っちゃう……。
はあ……寂しい」
「……それでも、応援してくれる？
……うん、ありがと」
「せっかく高校生活もう一度やるなら、
水泳も頑張りたいんだよね」
「……前の時は、途中でやめっちゃったんだ。実は」
「中学の時県大会に出たこともあって、調子に乗ってたんだよね、あたし。
練習行かないで友達と遊んだりしてた」
「そしたら、すぐ周りに追い抜かれちゃって。
タイムも全然縮まらないし、嫌になって……」
「結局、高二の時にはやめてたかなあ。
受験があるから、とか言って」
「でもやめてからも水泳部の大会の結果は気になっててさ。
なーんか、モヤモヤしてた」
「……うん、自分に都合のいい言い訳してた。
恋も部活も、なんにも成し遂げられない三年間」

「……それをこれから変える。
良いところみせるから。
だから、見守っててくれる？」

「……ふふっ。
あっ、ちょっとまって？髪の毛になんかついてる」

ひよりとあなた、歩くの止める。

「……うん、そのままでいて。とるから」

ひより、あなたにキスをする。

「（キスされた反応をみる間）……」

ひより、あなたにキスをする。

「……二回、しちゃった」

ひよりとあなた、歩き始める。
間があって。

「……ん？　なに？
え、あたしの髪にも、ついてるの？　ゴミ？
……そっか。じゃあ、……とってくれる？」

あなた、ひよりにキスをする。

【ボーナストラック：同じベッドでおやすみなさい】

○保健室

ひよりとあなたが恋人になった後日談。
あなたは体調が悪くなって保健室のベッドに休んでいる。
そこに、ひよりがやってくる。

「（呼びかけて）……おーい。おーい」

あなた、目を覚まして

「……大丈夫？
保健室にいるって聞いて、飛んできた」

「体調悪いの？
うん……うん
……そっか。」

「あ、無理しないでいいから。
そのまま横になっててて」

「あたしのことはいいの。
自分のことを大事にして？」

「……ちょっと頑張り過ぎたんじゃない？　最近。
よく欠伸してたし」

「テスト近いからって無理は禁物。
あたしの好きな人なんだから、気をつけてよね？
身体壊したら、あたしが悲しくなっちゃうから」

「まあ、あたしは、テスト余裕だから。
もう一回やってるし」

「教えてあげてもいいけど……。
ふふふっ、そうだよね。
それじゃ意味ないよね」

「まじめだなあ……。
そこがいいんだけど」

「……よし」

ひより、あなたのベッドに入ってくる。

「ふふふっ、入っちゃった。ベッド」

「あたしと一緒に寝た方が回復するの早いよ？
きっと」

「……ぎゅってさせて」

「……なんかね、好きなんだよね。匂い。
頭の匂いとか、嗅ぎたくなる。
（匂いを嗅ぐアクトをして）ふふふっ、だめ？
もうちょっと……（匂いを嗅ぐアクト）ふふふっ、すき」

ひより、あなたの頭を撫でながら喋る。

「……。こうしてくっついてると
なんか、安心する。
……どう？」

「ふふふっ。
落ち着かない？　逆に？」

ひより、あなたの頭を撫でるのをやめる。

「そうだね、少し眠った方がいいかも。
……いいよ。目、瞑って」

ひより、小さな声で耳元で、ゆっくり「にゃごちゃん」を数え始める。
数えている間に自分も眠くなっていき寝息を立て始める。

「……にゃごちゃんが一匹、にゃごちゃんが二匹……。
（ちょっと笑って）ふふふっ。
……にゃごちゃんが三匹、にゃごちゃんが四匹」

「にゃごちゃんが五匹、にゃごちゃんが六匹
にゃごちゃんが七匹、にゃごちゃんが八匹」

「にゃごちゃんが九匹、にゃごちゃんが十匹」

「にゃごちゃんが十一匹、にゃごちゃんが十二匹、
にゃごちゃんが十三匹、にゃごちゃんが……」

「……（寝息を立てる）」